
勇者、冒険をやめてダンジョン経営をする。

今ダ 果枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者、冒険をやめてダンジョン経営をする。

【Nコード】

N7877Z

【作者名】

今ダ 果枯

【あらすじ】

勇者がダンジョンマネージメントを始めようとするお話

500年前、イスカルト帝国西部のはずれ、廃墟となり、ダンジョンと化した魔物研究の塔

「くそ、裏切られた。帝国の奴ら、俺を捨てやがった」

勇者アリカは、一人ぼやいていた。

魔王を討伐し帝国に帰還した勇者は、初めのうちは厚待遇で迎え入れられたが。そのうち貴族達から疎ましがられ、邪魔になり。廃墟と化しダンジョンとなった、魔物研究の塔へと無断転送される始末である。

「貴族どもめ、魔力さへ残っていれば、呪い殺してやるのに」

恨めしそうに嘆く勇者はもう既に体の半分以上を魔性の植物にとりこまれていた。

元々この勇者、勇者らしくないのである。

呪術や付与魔法、畏魔法を得意とし即時戦闘より、入念に下準備された戦いを得意とした。もちろん勇者と呼ばれるのは、剣術をマスターし勇者魔法を扱えるからであるが。やはり彼のそれは歴代勇者のものよりも格段に劣った。

「くそ、ちくしょー」

勇者は謎の光に包まれ。

イスカルト帝国西部、塔のダンジョン、最上階

「ふはははは」

男は高笑いを上げていた。

「いいぞ、十階層以下の全魔物に告げる魔法使いと剣士の分断に成功した」

その報告に魔物の目の色も変わる。

「ゴブリンシャーマン部隊、いまそっちに剣士が行く、フロアに入った瞬間、風魔法と炎魔法をいっせいで投射、三、二、一、ゴー」

男は無数の魔法的モニターのある部屋でモンスターたちの指揮をしていた。

「オーク部隊、魔法使いが行くがそいつは女だ。魔法を避けつつ、無理はせず粘ってくれ。捕獲する」

「グオー」

オークーは魔法使い（女）を威嚇しつつ攻撃を避け続ける。

「何このオーク、早い！！」

オークでは、あり得ないほどの速さに戸惑いを覚えつつ。魔法を投射し続ける。

「早い、なら、範囲火炎魔法！！」

魔法使い（女）は異様に早いオークに投射型の魔法は当たらないと見切りをつけ魔力消費の多い範囲を放つ。それを見てモニタームの男はほくそ笑む。

「なんで！？ オークごときが私の魔法を受けきった！！」

「馬鹿め！ そいつらは素早さと魔法防御に調整をかけた、対魔法使用のオークだその程度の魔法かゆくも無いわ！！」

男はネタばらしをする。もちろん、魔法使い（女）には聞こえてないのだが。

さらに言えば、魔法防御オークのいる区画には魔法攻撃力減退の罠魔法が仕掛けてある。オークが倒れる道理が無いのである。

遠隔操作式のスライムを打ちつけ、魔法使い（女）を捕縛する。

「ふははははは、冒険者がゴミのようだ！！」

男は勝ち誇り高笑いにつづける。

「アリカ様、せっかくのイケメンが台無しです」

メイド服を着たりリスが男、アリカをなだめる

「ピアノ、ちょっとだけ、あと一時間、勝利の余韻に浸らしてくれ」
「駄目です、あと十五分もすれば、魔王様がやってきます」
即座に否定するリリスメイド、ピアノ。

「ああ、あの女か、また来るのか」

「いつも、楽しそうにお話されてるではありませんか」

「まあ、なあ」

やや、憂鬱そうな表情を作ったのちアリカは席を立つ。

「その前に、魔法使い（女）とちょっとだけ話してくる」

そう言つて、アリカは消える、ワープである。

「やあ」

爽やかな笑顔をつくるアリカ。

アリカは金髪黒目、アンバランスな組み合わせであるが。まあ割とイケメンであると自負していた。

「あんた、誰？」

魔法使い（女）はダンジョン97階のとある一室で捕縛されていた。

「僕が誰か？ うーん、まあ、誰でもいいと思うんだけど。500年前の勇者？ イスカルトの廃墟に住まう亡霊？ 男アリカ？ まあ何でもいいと思うけど」

「ふざけてないで、さつさと助けなさいよ！！」

魔法使い（女）イライラとした態度でアリカに怒声を浴びせる。

「いや、こっちが名乗ったんだから、そっちも名乗るのが普通だと思つよ」

「私！ 私は『イスカルト二番目の魔法使い』カイアナよ、さあ、さつさと助けなさい」

うん、知つてるといった表情でアリカはカイアナを助けない。

「えーと、君には残念な話なんだけど」

カイアナは理解できないと言った表情を作る。

アリカの後ろの扉が開き、ゴブリンがぞろぞろと現れる。

アリカはカイアナの服を脱がせ、腹に左手を押し当てる。

左手を押し当てた部分から微量の光が漏れたかと思うと魔法陣が展開される。

契約魔法の一種、魔法制限魔法。

「僕と契約してゴブリン達と子供を作ってよ！」

につこり微笑むアリカ。顔面蒼白になるカイアナ。決起するゴブリン達。

「多分、相手には困らないと思うなあ。ゴブリンの次はオークもトロルもいるから」

その言い残してワープして姿を消す。絶叫を耳に残すのも鬱屈だと思っただために。

「ピアノ、魔王様もう来てる？」

「もう五分ほど前に」

客間の扉をあけると赤茶色の髪と黒い瞳をもつ魔王とその後ろに猫耳女剣士が立っていた

「いやあー、待った」

「貴様、魔王様をどれだけ待たすつもりだ!!」

後ろの猫耳女剣士は今にも剣を抜いて襲いかかりそうな勢いである。

「やー、ヤンちゃん、いつもカルシウム足りてないねー」

「かる? かるかしかう……? 何だ! それは!!」

「ヤンちゃんは、いつも馬鹿な子だなあー」

「き、貴様!!」

「嘘ウソ、冗談だよー」

ボルテージが上がっていくヤン、アリカはニコニコ笑い、ピアノはため息をつく。

「それよりアリカ、このラノベの続き貸してくれ!？」

「魔王様!！」

空気を読まない魔王に突っ込みを入れるヤン。

「いやー、マオーさま、そのラノベ新刊は来月まで待ってくれ、ちなみに次巻完結らしいぞ」

「な、なにー、くー読みたい何とかできんのか!？」

「できんな、その煩わしさに苦しむがいい」

嫌な笑いを作る、アリカ。

「くっ、くそー、これが、この気持ちが悪なのか!？」

「断じて違います!！ 魔王様!」

「わかっておるわ! これは『魔王、勇者を倒しに旅に出る』の三巻の名言とも言えるセリフだ!！」

「す、すみません、魔王様、私の勉強不足です」

「ふはははは」

高笑いをあげるアリカ。

「しかし、羨ましいな、私も『ジ・アース』と言う世界に言ってみたのお」

「マオーも魔性植物に食われてみたらいいじゃないか？」

「それが、謎だ。五百年前、魔性植物に食われたお前はどうやって『ジ・アース』なる世界に行ったんだ？」

「俺にも、わからん？」

「しかも今では自由に行き来できるときた!」

「自由って訳じゃないぞ、月とか暦とか読んで、まあ、一月に一回くらい行き来できるけど」

「うらやましい!！」

500年前、謎の光に包まれた勇者は、全く知らない土地落ちた。異世界トリップである。

『ジ・アース』の『アメリカ』なる土地に降り立った勇者は、その世界で旅をし、異世界トリップしてから200年程たったころ『

ジ・アース』の『オタク文化』なる新文化の発信地『ジパング』で冒険者のノウハウ、ダンジョン攻略のセオリー、ジョブ別の攻略法、フラグの立て方、折り方を学び。この世界に帰ってきた。

「……余裕」

「何がだ？ アリカ」

「魔王、俺さ、いつかイスカルト帝国と喧嘩しようと思ってんだ」

「戦争か？ 勝てるのか？ イスカルト帝国なんかと戦争しようと思えば魔王軍だった相当浪費するぞ！」

「余裕、条件が違うって」

「ほう、それは見ものだな」

「だからさ、魔王、ドラゴン10匹ぐらい融通してくんね？」

「あはははは、無理に決まっとるわ！」

「だよー」

（後書き）

楽しんで頂けたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7877z/>

勇者、冒険をやめてダンジョン経営をする。

2011年12月25日12時51分発行